

土浦・宍塚市民が動植物調査

環境省と連携、自然保護目指す

雑木林や田んぼなどが広がる土浦市宍塚地区の里地里山で、NPO法人「宍塚の自然と歴史の会」が100年にわたって動植物の変化を見つめ続ける壮大な試みを始めた。

里地里山に生きる動植物の種類などを記録する環境省の「モニタリングサイト1000」事業の一環。宍塚地区は宍塚大池を中心に約100ヘクタールの里地里山が広がり、同会は植物については調査地内で花やつぼみ、実の状態などを月1回の頻度で定期的に調べ、外来種の侵入がないかも監視する。

動物では鳥類の越冬や繁殖状況を調べるほか、5台の自動撮影カメラを設置して夜行性動物を観察したり、カヤネズミ、アカガエル類、チョウ類の営巣や産卵状態、個体数などを記録したりしていく。蓄積されていくデータは、同省生物多様性センターがまとめて公表し、自然保護の施策にいかす。

里地里山は雑木林での薪(まき)拾いなど、人の手が入ることで独特の生態系を保ってきた。しかし、最近はその手も入らなくなり、里地里山を住みかとしてきたメダカやギフチョウの絶滅が心配される状況になっている。

同省のモニタリングサイト1000は里地里山や森林、干潟など自然のタイプ別に全国1000か所を選び、100年以上にわたり継続観察するというもの。2003年度から始まった。

市民団体が主体となる里地里山の調査は、昨年8月に宍塚など全国6か所が対象に決まった。これを受け、同会は昨秋から専門家の指導のもと観察を本格化させている。

同会は1989年に発足し、放棄田でのコメ作りや雑木林の下草刈りなどを続けてきた。会員数は現在、約620人を数え、その保全活動は全国的に注目されている。

会の理事長を務める及川ひろみさん(63)(つくば市上ノ室)は今回の事業の意義について「定期的に観察していれば異変をとらえやすく、保護に役立てられる」と話している。

(2007年2月6日 読売新聞)



「市民の手で自然の変化を見つめ続けたい」

と話す及川さん(宍塚大池で)